

氏名	三好弥生
学位の種類	博士(社会福祉学)
報告番号	甲第74号
学位記番号	福博第4号
学位授与年月日	平成28年9月26日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
論文題目	高齢者を看取る過程における介護福祉士の意識の変容 Changes in the Awareness of Certified Care Workers in the Process of Providing End-of-life Care for Elderly Individuals
論文審査委員	主査 教授 宮上 多加子(高知県立大学) 副査 教授 杉原 俊二(高知県立大学) 教授 和田 安彦(高知県立大学) 教授 長澤 紀美子(高知県立大学)

## 論文内容の要旨

2014年の「老人ホーム」における死亡割合は5.76%であり、20年ほどの間に約5倍に増加している。認知症や老衰が進行した高齢者の終末期は、経口摂取が難しくなることが知られるが、経管栄養の適応については、尊厳などの観点から慎重であるべきとの見方へ変わりつつある。

そこで、認知症や老衰が進行した要介護高齢者の緩やかに死に至る過程において、要介護高齢者を看取る介護福祉士の意識とその変容過程を明らかにすることとした。加えて、看取り介護における介護福祉士の対象を捉える観点について考察することを本研究の目的とした。

調査対象及び調査方法は、特別養護老人ホーム5ヶ所の参与観察、及び介護職として看取り経験のある実務経験3年以上の介護福祉士17名のインタビューからデータを収集した。なお、研究は高知県立大学社会福祉学部個人情報保護・倫理審査委員会の承認を得て開始した(第259号、平成24年11月12日)。データの分析は、質的記述的分析方法を用いて内容のコード化およびカテゴリー生成を行った。

介護福祉士の語りを分析した結果、要介護高齢者を看取る介護福祉士の意識は、【命を繋ぎとめる】【苦痛なく安らかに】【看取り介護への不安】【看取り介護における倫理的葛藤】【看取り介護の振り返り】【誇りとやりがい】【その人らしい生の終焉】【仕事を越えた特別な関係】【経管栄養への複雑な思い】の9つのカテゴリーで説明することができた。また、これらのカテゴリーの関係から、要介護高齢者を看取る介護福祉士の意識の変容について説明することもできた。さらに、【仕事を越えた特別な関係】は、介護福祉士が要介護高齢者に向き合う際の特性であることが明らかとなった。

これらの研究結果を基に、介護福祉士の対象を捉える観点について、先行理論や先行概念と比較し考察を行った。その結果、介護福祉士は、終末期にある高齢者の対象特性から「主観的な関わりが必要」とされていること、「いのちの受け止め手」になろうとしていることが考えられた。さらに、介護福祉士は、相対する人から「必要とされる」ことに支えられ、要介護高齢者に対して、「二・五人称としてともにある」という意識をもつことが示唆された。これら

の結果は、積極的な医療を望まない高齢者の看取り過程における介護職の役割、介護方法を開発するための基礎的な知見となりうる。

## 審査結果の要旨

「高齢者を看取る過程における介護福祉士の意識の変容」は、特別養護老人ホームに勤務する介護福祉士を研究対象として、高齢者との関係性を含めた終末期ケアに関する意識を解明しようとした研究である。この研究テーマの背景としては、従来は看取り数が非常に少なかった特別養護老人ホームという生活の場において、社会状況や制度上の変化から終末期ケアまでを業務範囲とするようになってきた経緯がある。介護職は利用者の生活支援を業務の中核に位置づけ、相互の関係性を構築することを重視した働きかけを行っているが、老衰が進行し身体・精神機能が低下していく中で、介護福祉士の意識がどのように変容していくのかを探ることが研究課題の中心である。

特別養護老人ホーム5カ所での参与観察および介護福祉士17名のインタビュー調査を実施し、高齢者の身体機能の低下に伴って業務量が増加する食事介助を中心として、終末期に介護職が行うケアの内容とそれらの業務に対する意識、また胃瘻を造設した高齢者への関わり方の変化やそれに伴う関係性の変化等を丁寧に分析している。要介護高齢者を看取る介護福祉士の意識として、【命を繋ぎとめる】【苦痛なく安らかに】【看取り介護への不安】【看取り介護における倫理的葛藤】【看取り介護の振り返り】【誇りとやりがい】【その人らしい生の終焉】【仕事を超えた特別な関係】【経管栄養への複雑な思い】の9つのカテゴリーを析出している。この中の【仕事を超えた特別な関係】は、介護福祉士が要介護高齢者に向き合う際の特性であり、介護福祉士は、終末期にある高齢者の対象特性から「主観的な関わりが必要」とされており、その結果「いのちの受け止め手」になろうとしていることが想定され、要介護高齢者に対して、「二・五人称としてともにある」という意識をもつことが示されている。

本研究におけるテーマは、高齢者の終末期ケアの場が、生活の場である福祉施設へも広がっている社会状況を背景として、老衰という生命体としての最後のステージにおいて、介護職はどのような関わりをもってケアを遂行しようとしているのかを解明しており、この分野の研究が少ない中で、実証研究に基づいた貴重な成果である。超高齢社会における高齢者の終末期ケアに関して、そのケアの一端を担う介護職の立場に立った研究成果は、福祉施設における看取り介護実践や終末期ケアにおける多職種連携にも活用できる知見であると言える。

審査委員会では、多様な語りの中からテーマに沿ったデータを整理し、段階的な分析を行って結論を導いている点を高く評価した。さらに研究成果の活用や研究の発展について、介護福祉学の実践領域だけでなく、専門職養成教育への応用を奨励した。

以上により、本学位審査論文は新規性や独自性があることや学術的創造性を備えていることを確認した。今後の研究成果の活用や発展性についても実現性があり、学位授与の水準を満たしていると考えられ、審査委員会は学位申請者三好弥生氏が、博士（社会福祉学）の学位を授与される資格があるものと認めた。